

「保育」の原点96

育児の神様 内藤寿七郎博士の育児 (17)

～「いけません」を使ってはならない年齢は?～

文 葛西得男

text by Tokuo Kassai



内藤寿七郎著「育児の原理」

小 児科医約50年の間に、私が得たことは、「乳幼児のしつけ方は年齢によって違えなければならぬ」ということでした。子どもの成長には、いくつかの節があるので、それに連れて行うことです。

母親に依存のゼロ歳児と、自我の芽生える2歳児と、反抗行動の3歳児と、なぜかということが分かり始める4歳過ぎでは、子どもの脳の発達程度が明らかに違います。それに合わせてしつけ方も区別しなければ、せっかくの円滑な脳の伸び方を、ゆがめたものにしてしまう危険があるようです。

現在は、この年齢によるしつけの違いが分からず、4歳過ぎの子どもに使うべき「いけません!」という禁止の言葉を、ゼロ歳児の、ハイハイするところから使っています。小さいときから「いけません」を聞かされて育つと、いつしか母親の言葉は子どもの耳を素通りしてしまいうようになります。4歳を過ぎて「いけません!」といくら強く言っても、もう効き目がなくなってしまう。

そればかりか、母親の話しかけるすべての言葉に十分注意を向けられない。

子どもに育ってしまおうでしょう。どうしてこんなに言うことを聞かない子になったのかと、子どもを責める前に、今までやってきた誤ったしつけ方を反省してください。

社会生活に参加して、貢献できる人間になるよう、まず家庭で、脳の発達に応じた働きかけが親としてのしつけでしょう。現在目の前にいる子どもには、その場その場でのしつけも必要ですが、それはあくまでその子の自発的な自己統制(セルフコントロール)を強めるものであってほしいのです。それを行うには、ゼロ歳児にも5歳児にもいっしょよくたでは困ります。

年齢を無視して行いがちのしつけを反省してください。例えば「いけません!」は、どうしてもとか、なぜとかの質問の始まる4歳を過ぎるまで、大事にとっておいてください。

何度も書いてきましたが、ゼロ1歳児のしつけは、母親の優しい気分の抱っこだけで十分です。たとえば、いろいろ気になることがあったとしても、それはゼロ歳児から1年半くらいまでの発達過程に誰しもやる過程と違って、あまりやきもきしないでよいのです。

おだやかな母親の目つき、顔つき、それに肌に接して、子どもは人間性を肌から吸収していきます。そして、母と子の心が通い合って信頼関係が育ちます。と同時に、目、耳、皮膚の感覚を用いて脳は刺激され発達していきます。それができてこそ、2歳からの自発的の自己統制のしつけが有効になるのです。

「育児の原理」―いけませんを使ってはならない年齢はより



Profile

1950年12月8日大阪に生まれる。
1972年、追手門学院大学卒業後、米国ボストンカレッジに留学。
1975年に帰国後、アップリカ葛西に入社。営業部、副社長、社長を経て、1996年に社会福祉法人 松稲会 理事長に就任。
松稲会は社会福祉法人として高齢者介護施設「アップリケア」と認可保育園マザーシップ保育園を運営している。
アップリカ葛西 副社長時代に国連環境計画 (UNEP) のスペシャルアドバイザーとして子供たちのために地球環境問題を考えるプロジェクトに参画し、世界の賛同者と世界会議、イベント普及活動などを行いながらその人脈などを広げ現在に至る。